



@moroi_ao

〈一年〉

空の潮鳴り / 熊谷 夢奈

どこまでも広がる青空と、芸術的な雲たち。息をのむような美しさを背景に、首と腰に腕を回して額を合わせる男女。ここがどこなのか、二人が誰なのか確認したくても、光の反射と距離のせいで難しい。

「ねえ……!!」

声をかけようと二人に近づくと、眩しい光で視界が白く染まる。

ああ、まただ。そう思いながら、私は現実へと戻っていくのだった。

部屋中に鳴り響くアラームの音で、意識がはつきりとしていく。

目の前に広がるのは青空でも雲

でもなく、見慣れてきた天井だ。

「……またか」

重たい身体をゆっくりと起こしながら、つぶやいたのは夢のこと。

最近、変な夢を見るようになった。それもただの変な夢ではなく、覚えて

ているのは同じ場面という変を通り越して不気味な気さえするもの

だった。本当に同じところしか覚えていないのか、はたまた同じ夢を見

ているのか。何もわからないまま、夢を見始めてから数か月が過ぎよ

うとしている。忙しい足音が近づいてきて、勢

いよく寝室のドアが開く。

「しーちゃ……いや、汐音え！^{しおね}いつまで寝てんだよお！」

朝に似つかわしくない声量で私を呼ぶのは、私と瓜二つの妹の天音^{あまね}。私たちは一卵性双生児、つまり双子だ。

「あーちゃん、おはよ……」

「おはよ……じゃないよ、しーちゃん。いつまで天音が起こさなきゃいけないの？」

「ごめんって」

呆れ顔の天音は「もうほんと、朝だけは頼れないお姉ちゃんなこと」と、すっかり移ってしまった母親の

口癖を口にしながら、キッチンへ戻

っていく。

こうして朝が弱い私を起こすのは、幼い頃から天音の役目だった。

大学進学をきっかけに実家を出ても治らずにいる私たちはこの日課と言っても過言ではないやり取りを続けている。一度頑張って治してみると伝えたのだが、「ただでさえいつも超頼れるんだから、朝克服されたらちよつと困る。止めないけど」とまんざらでもなさそうだったのでやめた。

だからこのままですなんて天音にバレてしまったら怒られるので、真意は言わないでおいた。

これを世の中ではシスコンと言

うのだろうか、可愛い妹が大好きで

何が悪い。私と瓜二つでも、長瀬天

音という存在は唯一無二。出来るな

ら今の世で結婚したいところだが、

近親相姦という大きな壁がある。行

きついた結論は来世で出会えたら

結婚。友人にこの話をする、「危な

い匂いがする」と言われるが、生ま

れ変わったら的な想像だから近親

相姦には当たらない。結果これは恋

ではないから大丈夫という持論で

返り打っている。

「しーちゃん！ ご飯にするから

早く！ 電車遅れる！」

天音にせかさながら二人で朝

食を急いで済ませ、化粧に着替えと

準備を済ませ、最寄り駅へ。到着と

ほぼ同時に電車が来たので急いで

乗り込み、大学へ向かう。

大学までは十五分ほど。寝るにも

物足りないし、大してスマホを見な

い私にとっては中途半端な時間だ。

いつものようにぼおつとしていた

ら、ふと最近の夢のことが気になっ

た。「あれはきつと運命の人かも」な

んてお気楽な考えが出来たらよか

ったものの、あいにく男という存在

に興味はない。それに、誰かもわか

らない。そうなれば、運命の人だな

んて言っていられないような気もする。

考えても無駄だ。現実逃避もかねて、正面に座る愛しい妹を眺める。

同じ顔なはずなのに可愛く見えるのは、妹マジックなのだろう。

天音はこちらの視線に気づく様子もなく、スマホに夢中になっている。最近、明らかにこういうことが増えた。しかもわかりやすいにやけ顔をしている。好きなアイドルでもできたのだろうか？ いや、天音の場合俳優の方が好みか？ 男という存在に興味のない私とは反対で、天音はイケメンに目がない。

「しーちゃんどうかした？」

「いやあ、何見てんのかなって」

「聞いてよしーちゃん。最近ね、彼氏できたんだ」

「……よかったじゃん」

そうは言ったものの、内心は信じたくないという気持ちでいっぱいだった。

私のような男に興味がない人間ではない。天音も普通の女子大生なんだから、彼氏ぐらいできる。そしてすぐ別れる。大丈夫だ、何も心配いらない。そう言い聞かせた。

「……どんなやつ？」

「どんなって……あ、写真あるよ」

そう言って天音が見せてきたものに、私は目を疑った。

スマホに写っていた写真は、ここ最近の夢の中で見た景色と同じだった。

天音は惚気話を始めたが、話なんて入ってこない。

この妙な胸騒ぎは何なのか。そればかり考えていたからだった。